



中高生とともに差別と闘う

『希望の灯』

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



人権こども塾夏季二泊研修

いろんなことがあった今年の夏ですが、「人権を語り合う中学生交流集会(以後中学生集会)」や「人権こども塾夏季一泊研修」、「鳴門市人権地域フォーラム」について語らないわけにはいきません。

とはいえ、中学生集会は参加できなかったので置いておくとして、「人権こども塾夏季一泊研修」についてはふれておきたいと思います。

この一泊研修は、私が実現したかったイベントの一つでした。時間を気にせずじっくり語り合えるという独特な環境は、人を特別な感情に誘うのかもしれない。そんな経験を、かつて何度も経験してきました。「あの経験をもう一度！」との思いで企画したのが、今回の一泊研修でした。

場所は岡山県、国立療養所長島愛生園と邑久光明園です。皆さんはご存じでしょうか？もしよければ、長島愛生園のHPから「歴史館」をご覧ください。全国にあるハンセン病療養所の一つであることが分かっていただけるかと思いますが、こちらに、人権こども塾から十七人の中高生をつれて研修に行きました。

貸切バスの移動だけで午前中から、現地に到着して研修を始めたのは午後から。歴史館で館の方からお話をうかがい、その後は園内のフィールドワークです。監房跡、慰霊碑、旧収容所、今も残る入所時の桟橋。その傍らに佇む「故郷への想い」の碑。そして入所者か

らのお話。そのどれもが、日頃の生活では体験できない濃い内容であり、お話でした。それだけでも十分なのですが、その後、自分たちで夕食のカレー作り。これがまた格別美味しく感じるのが不思議です。

そして、いよいよ夜の研修の始まりです。あらためてハンセン病のこと、そして今回の企画に多大なるご協力をいただいた、独協医科大学木村真三さんからの東日本大震災についてのお話。そして中高生一人一人が、マイクを握りしめ、自分の言葉でそれぞれが感じた思いを返していきます。そのどれもが新鮮でした。

ミオのデビュー語り

発言した塾生の中で一人、今年から高校生として入塾したミオという子がいます。

昨年度中三だったミオは、思わぬ出会いの中で途中から参加するようになりました。昨年の秋に開かれた「PTA親と子で人権を考えるつどい」では、周りの雰囲気、飛び込むかのように手を挙げ、次のように語りました。

「学校に行けない日が続いていたとき、遠足に行くかどうか悩んでいると、特別支援学級の友達が『ミオちゃんが行くなら行く』と言ってきて、私は行くことができた。行動も一緒だったし、バスの席も隣だったし、帰りのバスで、『今日は来てくれてありがとう』と言ってきて、それが私にとっては何よりも嬉しかったんです。」

「納々と、一言一言を噛みしめるように懸命に語る姿に、あたたかい拍手が広がっていました。」

でも、ミオのなかにどんなエネルギーが潜んで参加するようになったのかは分からないまま、高校生になった彼女は毎月の集まりに意欲的に参加してきます。

夜の研修会。ミオは自身の両親のことについて初めて語り出しました。その日の彼女の感想です。

「私は今年からこども塾に参加しています。今回がこども塾の二日間です。二日間を通して印象に残っているのは、長島愛生園と邑久光明園の違いです。(中略)『ハンセン病よりコロナの方がひどい』と言われてました。ハンセン病もコロナも両方に通じることは、知識がないから変に怖がって差別をしてしまっているのでは私なりに考えました。コロナも今はある程度の知識がついているから、いたずらなどは初めのころより減りましたが、まだまだここには残っていると思います。無知は恥。まさにそうだと思います——」

希望の灯

「——一日目の夜、カレーを食べ終わってから、いつもだと一緒に過ごすことのない時間に語り合いを全員でしました。自分もなかなか口に出すことのできなかった両親のことを初めて語ってすっきり

しました。その後もお風呂をすませ、先生や高校生たちと、『なぜ先生になったのか』などについて語り合いました。日付をまたいで話すことがないので、たくさんゆつくり語り合えて、自分も中学校教員に向けてもっと頑張らなくてはと思いました。」

実は両親とともに難病のなかで闘病生活を送っていました。ミオも不登校になりながらふんばり続けていたのです。両親の思いを引き受けつつ、そして将来は、自分と同じような境遇にある子を支え、力になりたい。だから学校の先生になる道をめざしたいと、初めて口にしたのです。聞いていて背筋が伸びました。胸が熱くなりました。夜の研修が終わったあとも、「どうすれば教師になれるのか、今の自分になれるのか」と、必死に食らいつくように問いかける彼女の姿に、「絶対こんな子に教師になつてほしい」と強く思いました。単に勉強して成績を上げることだけに注力するような空気がありません。そうではなく、自分の中にしっかりとれた芯をもち、「だから頑張る」と迷いなく言える学力、そんな力を多くの子に持つてほしいと願います。今回のような語りが実現できるのが、独特な環境を生む一泊研修のなせる業かもしれません。でもそれがミオのような子たちの小さな灯となれるのなら、それは希望の灯と言えるのかもしれません。

(つづく)